

播磨国宍粟郡における製鉄遺跡

田路 正幸

一 はじめに

兵庫県の中西部に位置する宍粟市は、平成一七年（二〇〇五）にそれまでの宍粟郡山崎町・一宮町・波賀町・千種町の四町が合併して成立した。総面積は六五八・五四平方kmに及び、兵庫県内第二位の広大な市域を抱えているが、全体の八九・六％を森林が占めている。市域の中央には播但国境に源を発する揖保川が貫流し、北西の千種町は千種川の上流域となっている。

古代以来、播磨国は広大な国域を有し、南は瀬戸内海に臨み、北は中国山地の東端に連なり、その産物にも多様なものがあるが、とりわけ播磨国を特色付けるものとして北西山間部の宍粟郡・佐用郡における鉄の産出を掲げることができると。その背景には、中国山地一帯に分布する花崗岩に由

来する原料としての良質な砂鉄と、燃料としての木炭を供給する豊富な山林資源の存在がある。

特に宍粟郡^①は、奈良時代初頭の『播磨国風土記』の産鉄記事以来、明治一〇年代に至るまで盛んに鉄生産が行われた地域として知られている。宍粟郡から産出される鉄素材は、中世以降日本刀の原料として最高品質を誇ったといわれている。また近世にかけては、「宍粟鉄」・「千草鉄」・「千草鋼」の名のもとに、消費地に広く流通したことが知られている。

宍粟郡の製鉄史については、地域史研究の先学^②により主として文献史料の収集やそれに基づく多くの研究成果が蓄積されて来た。また、過去には鉄山集落の民俗調査^③も行われ、これらの研究成果は、各町の史誌^④にも反映されている。

一方、製鉄遺跡の考古学的な調査については、一部の個別遺跡の発掘調査や波賀町域の分布調査^⑤

が行われているが、必ずしも宍粟市域の全容が明らかにならなされているわけではない。ここでは、これまでの製鉄遺跡の発掘調査や分布調査の成果を中心に、遺跡から見た宍粟郡における鉄生産の展開について整理を加えることとしたい。

二 『播磨国風土記』の産鉄記事

奈良時代の初頭、和銅六年（七一三）の官命により、靈龜元年（七一五）頃には成立したとされる『播磨国風土記』⁶には、讃容郡に一か所、宍粟郡に二か所の産鉄記事がみられる。

讃容郡の条においては、「鹿庭山」の「四面に十二の谷有り。皆、鉄生ふること有り。難波豊前朝廷に始めて進りき。見顕しし人は別部犬、其の孫等奉発り初めき。」とある。ここで注目されるのは、鹿庭山（現在の大撫山に比定される）の鉄が孝徳天皇（在位六四五～六五四）の時に初めて朝廷に貢進されたこと、鉄を発見したのは別部犬なる人物であったことである。

宍粟郡の条においては、柏野里の敷草村のうち

に「鉄生ふ。」の記述がみられる。柏野里は現在の山崎町西部の菅野・土万地区から佐用町三河地区、さらには千種町を含む地域に比定される。敷草村は、現在の千種町を中心とする地域である。御方里では、「大内川。小内川。金内川。（中略）鉄生ふるは金内と称ふ。」⁷という記述がある。御方里は現在の一宮町北部の三方の地名を遺称とする。大内川は繁盛地区を流れる揖保川本流に、小内川は公文川、金内川は河原田を流れる阿舎利川に比定する説にしたがっておきたい。⁸

これら風土記に記された「鉄生ふ。」の記述が、砂鉄の産出を意味する可能性も否定できないが、それにしてもこれらの地域で少なくとも奈良時代初頭には鉄生産が行われていたことを示すものである。

播磨北西部の鉄生産の開始については、『播磨国風土記』讃容郡の条に記された別部犬の記事が示唆するように西接する吉備地域との関連が想定される。また、宍粟郡の鉄生産については、『播磨国風土記』や藤原宮跡、平城宮跡出土木簡⁹に現われる山林資源の貢納を職掌とする山部氏の関与

があつたものとみられる⁽¹⁰⁾。

三 古代・中世の製鉄遺跡

(1) 西下野製鉄遺跡⁽¹¹⁾

西下野製鉄遺跡は、現在の佐用郡佐用町(旧・南光町)西下野に所在するが、昭和三〇年(一九五五)に佐用郡南光町となるまでは宍粟郡三河村であつた⁽¹²⁾。遺跡は、千種川が上流域から中流域へ向かう地点に位置し、狭隘な谷間を望む比高差約五〇mの北向きの緩斜面を段状に削り出した平坦面上に営まれている。昭和四七年(一九七二)から四八年(一九七三)にかけて、中国縦貫自動車道の建設に伴う兵庫県教育委員会の発掘調査により、A地区・B地区の二調査区から製鉄炉跡五基が検出されている。

A地区上部域では、北向きの緩斜面に長辺約十m、短辺約六mの隅円長方形の大型土坑を掘り込み、中心部に長径二・一六m、短径一・七mの隅円長方形の焼成面と下層に被熱した堆積土を有する「たたら炉」の炉底下部の残存が確認されて

いる。炉跡の周囲では砂鉄、木炭の集積が認められ、須恵器の坏、土師器の甕などが出土している。

A地区下部域では、炭・灰を充填した下部構造を持つ長さ一・一m、幅一mの長方形の炉基底部分(「たたら炉(イ)」)が確認され、周辺から多量の炉壁や鉄滓、須恵器の坏底部、土師器の坏・甕などが出土している。さらに上方で長辺約九・三mの弧状の掘り込みと焼土面が検出され、多量の鉄滓と炉壁の出土から炉跡と考えられている(「たたら炉(ロ)」)。

B地区上部域では、長軸三・七m、短軸三mの焼土面と、斜面に直行する楕円形状の炉底部が検出され、炉周辺で須恵器の坏底部が出土している。B地区下部域においては、長さ約四・九m、幅約四・七mの隅円方形の半竪穴状の掘り込みとその内部で長さ二・二五m、幅一・二四m、厚さ一〇cmの炉底基礎部が確認されている。

西下野製鉄遺跡で検出された炉跡は、いずれも炉基底部分のみの残存であり、炉本体の構造は明らかでないが、焼土・炭・灰層から構成される下部構造を伴うものがある。炉の基底部分は、いずれも

隅円長方形を呈し長方形箱形の炉形態を有したものとみられる。操業時期については、周辺から出土した須恵器の坏、土師器の坏・甕などから奈良時代初頭に位置付けられている。現在のところ宍粟郡内では最古の製鉄遺跡であり、『播磨国風土記』の産鉄記事との関連が注目されるのである。

(2) 安積山遺跡

安積山遺跡¹³は、一宮町安積に所在し、一宮町北部を南流する揖保川（三方川）と、波賀町を流下して来た引原川との合流地点北方の山麓に立地する製鉄遺跡である。平成六年（一九九四）度に実施された東向きの小尾根における発掘調査では、三段にわたって削り出された平坦面上で、大型の製鉄炉跡六基、小型の製鉄炉跡五基、亀甲状の基底部を有する特殊な形態の炉跡一基の合計一二基の製鉄炉跡が確認されている。

大型炉は、最下段で三基、中段で一基、上段で二基が検出されている。大型炉の下部構造は、全長六〜七・〇m、幅一・二〜二mの舟底状の掘り

込みを行い、炉底部は全長二・八〜三・四m、幅〇・七〜一・一mを測っている。炉本体は、長方形箱形を呈したものと考えられる。大型炉の特徴として、炉の本体と排滓溝が一体となった「コ」の字状の掘り方を有することが指摘できる。大型



安積山遺跡大型炉Ⅱ-1



安積山遺跡調査地全景



安積山遺跡小型炉Ⅰ-1・Ⅰ-2



安積山遺跡大型炉Ⅰ-8

(写真提供：宍粟市教育委員会)

炉の中には、炉壁を外側に引き倒した状態のものや、「木呂穴」と呼ばれる送風孔の残る炉壁片が遺存することから、送風装置の使用をうかがうことが出来る。炉の底部やその下部にはかなりの鉄塊や砂鉄が残されていた。また、炉の上方には燃料である木炭置き場、下方では原料の砂鉄置き場が検出されている。

小型炉はいずれも最上段の平坦面で検出され、炉の下部構造である舟底状の土坑は、全長三m前後、幅一m前後を測っている。炉本体は長方形箱形とみられ、全長一m前後、幅〇・三m程度と推定される。いずれの炉にも炉内滓や鉄塊が残されていた。大型炉、小型炉ともに、舟底形の土坑内には、防湿のために木炭が長軸に平行して敷き詰められていた。

特殊形態炉は最上段の平坦面で検出され、南北約二・九m、東西約一・七m、深さ二十五cmほどの隅田長方形の掘り込みを有し、そこに砂土を充填した上にさらに亀甲状に砂土を盛り上げていた。その上部に炉が置かれたものとみられ、その規模は長さ九〇cm、幅二五cm程度と推定される。

安積山遺跡では、下段から上段に向けて順次操業が行われたものとみられ、大型炉から小型炉への先後関係を想定することが出来る。その後の発掘調査で南側の尾根や谷を挟んだ東側の斜面でも製鉄炉が確認されているが、そのあり方は散在的であり、本地点が中心的な位置を占める状況は動かない。

出土遺物は僅少であるが、周辺から須恵器の椀などが出土しており、平安時代末頃を中心とする比較的短期間に操業されたものと考えられ、古代末から中世への移行期における播磨地域では最大規模の製鉄遺跡として注目される。

経営主体については明らかでないが、地方の豪族層の経営とは考えがたく、国衙が関与した可能性も考慮される。中世、この地域には安積保が置かれ、安積氏が下司・公文職を務めている。安積氏の出自については不明な点も多く鉄生産との関係も明らかでないが、播磨国衙の在庁官人出身である可能性が留意される¹⁴ところである。

(3) 高保木製鉄遺跡(兵庫県指定史跡)

高保木製鉄遺跡¹⁶は、千種町西河内に所在し、千種川最上流域の河内川との合流地点の西方に位置している。昭和四二年（一九六七）、植林木の苗畑の造成工事中に製鉄炉床が発見されたのを契機に、翌年の三月から四月にかけて、日本考古学協会生産技術特別委員会製鉄部会委員長の和島誠一・岡山大学教授を調査責任者として、兵庫県内では初めての本格的な製鉄遺跡の発掘調査が行われた。

発掘調査の対象箇所は、旧千種北小学校の北方背後の尾根の東向き斜面のA地点、千種川右岸沿いの低位河岸段丘上の平地のB地点である。A地点で二基、B地点で二基の製鉄炉が調査されている。

A地点は、千種川左岸に向かって派生する尾根の南東向きの標高約五〇〇m、比高差約六〇mの山腹斜面に立地する。第1・2トレンチが設定された場所は、幅六m以上、奥行三・五m以上の半円形の緩斜面を削り出し中央に設けた平坦面に炉が築かれている。炉床の下部中央には、炉底に対応する方形周溝状の土坑が設けられている。土坑底面は防湿のため加熱し炭を含む黒色土を充填し、

さらに炉壁片や焼土塊を小判形状に配列して炉基底部としている。炉本体の規模は、全長三・一五m、幅二・一五mの長方形を呈し、炉内の規模は全長一・九五m、幅九五cmと推定されている。

A地点B区においても斜面上に掘削された長さ六m以上、幅約三・四m、深さ約五〇cmの木炭や焼土を充填する炉床の下部構造を構成する土坑が検出されている。後世の削平が著しく詳細は明らかでないが、炉基底部の残存とみられる炉壁片の配置からこの炉は長方形を呈し、内法は全長一・二m前後、幅約七〇cmと推定されている。

B地点I区炉は、一転して千種川右岸に沿った平地に立地する。浅い皿状の大型土坑を掘り込んだあと、土坑底面に炭を敷いて焼成し、焼土や黒色土を充填する。炉基底部の外堤にあたる部分に断面U字状の舟底状の溝を四周に巡らせている。溝内に焼土、灰を充填しさらに全面にわたって焼土で覆うことによって、外縁に堤を巡らした長方形の土坑が形成され、上部に炉が設けられたものと考えられる。炉本体は残されていないが、外形規模は長さ約四・二m、幅約三・〇m、内法は長

さ約二・四m、幅約一・三mの長方形を呈するものと推定されている。

B地点IV区B炉は、I区の南東の平坦地に位置する。一辺一〇m×八mの浅い大型土坑を掘り、中央の炉の位置に中型土坑を設けて焼土や炭を充填する。さらに方形周溝状の土坑を四周に配して内部に焼土を充填し、中央土坑を掘り込んで焼成粘土や炭、焼土を充填して下部構造としている。周溝上に炉壁、中央土坑上に炉底が構築されたとして、炉本体の全長約三・五m、幅二・七m、炉内の長さ一・九m、幅一・一mの長方形を呈するものと推定される。

高保木製鉄遺跡の発掘調査で確認された炉の形態はいずれも長方形箱形を呈するものとみられ、尾根の中腹斜面に立地するものと河川に沿った平地に立地するものが存することが明らかになった。

いずれの製鉄炉跡からも土器類の出土がなく操業時期については課題が残るが、方形周溝状土坑の出現及び炉底下部の下層中央の舟底状の土坑の出現に画期を求め、A地点B区炉↓A地点第1・2T炉↓B地点I区炉・B地点の相対的な変遷が

想定されている。その年代観について報告書では、「中世的な歴史的位置」にあると評価している。⁽¹⁶⁾

(4) 小野段林遺跡⁽¹⁷⁾

小野段林遺跡は、波賀町小野に所在する。波賀町域を南流してきた引原川が南部の小野地区で大きく東向きに流路を変える地点の右岸、北向きの比高差約四〇mの断崖状山麓の肩部付近に立地している。

以前より鉄滓が散布し製鉄遺跡の存在が想定されたことから、平成三年（一九九一）に兵庫県教育委員会による生産遺跡分布調査の一環として確認調査が実施された。標高二五〇m付近のA地点で二基、やや高位のB地点で一基の製鉄炉跡が検出されている。A地点では北向きの緩斜面を東西約一五m、南北約一〇mの範囲に削り出した平坦面上に炉が築かれている。上層で検出された1号炉は、約三m×約四mの掘り方を有し、等高線に平行に長軸を置く長さ約二・七m、幅約一・四mの長楕円形の下堤部を築いている。下堤部は強く火を受けて、部分的に焼土塊となっている。炉底

部は長さ一・五m、幅〇・六m程度の長方形を呈し、炉本体も長方形箱形であったとみられる。炉底部周辺には、防湿の機能を果たしたとみられる溝状の掘り込みが巡らされている。炉床部は周囲の溝に向かってやや落ち込んでおり、全体に亀甲形を呈している。

2号炉は、1号炉の断ち割り調査に伴い下層で検出されている。1号炉の保存のため全容は明らかではないが、幅約一mの土坑を掘り込み、防湿のためとみられる炭が充填されている。平行する二条の粘土帯が認められ、その内法幅約〇・五mが炉底部の幅と考えられる。

B地点1号炉では、操業後の炉壁を倒して新たな炉の基底部に再利用した状況が確認されている。炉壁は長さ二・一m、幅〇・五mを測り、火を受けた痕跡から炉の長さが一・八m程度の長方形箱形炉と推測される。西側の高位に矩形の石組みがあり、鞆座の基礎であった可能性が指摘されている。

小野段林遺跡で調査された三基の炉は、いずれも長方形箱形を呈するものとみられるがそれぞれ

異なる地下構造の形態を有し、A地点2号炉↓B地点1号炉↓A地点1号炉の操業順序が推定されている。いずれも土器類の出土はなく、操業時期については確定できないが、報告書では「中世の一定段階に位置づけられる可能性」が指摘されている。

小野段林遺跡が所在する波賀町南部から一宮町南西部の引原川下流域は、中世に三方西庄と称された地域である¹⁸⁾。鎌倉時代末の元応二年(一三二〇)の「中村音阿護状」を文献史料の初出とするが、武蔵国秩父郡に出自を有する中村氏及び一族である大河原氏が三方西庄の地頭職を務めている。大河原氏が三方西の地で備前国長船の刀鍛冶である景光・景政に鍛えさせた二振の大刀が知られている¹⁹⁾。正中二年(一三二五)銘の大刀は、一族の出所地である秩父大菩薩に奉納されたもので、現在御物となっている。嘉暦四年(一三二九)銘の大刀は、播磨国飾磨郡の広峯山へ奉納され、国宝に指定されている(埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵)。

中村氏あるいは大河原氏が三方西の地に西遷し

た背景には、鉄を含む宍粟郡の山林資源の掌握があったことが指摘されている²⁰⁾。もとより小野段林遺跡との関係は明らかでないが、三方西庄において中世に鉄生産が行われていた事実の一端が明らかになったといえることができる。

(5) 小茅野後山遺跡

小茅野後山遺跡²¹⁾は、山崎町小茅野に所在する。山崎町の西部を流れる千種川水系の志文川の最上流域の小支流である小茅野川源流の千種町と境を接するきわめて狭小な谷筋に位置している。平成一二年(二〇〇〇)、道路改良事業に伴い兵庫県教育委員会によって発掘調査が実施され、No.5地点で一基、No.6地点で二基の製鉄炉跡が検出されている。

No.5地点は小茅野川のさらに支流である岩尾谷川の左岸と西向き山麓斜面に位置する。製鉄炉は南北約一四m、東西約七mの半月状に削り出された平坦面上に長軸を等高線に平行にして築かれている。西側は後世の炭窯によって削平されており、全容は明らかでない。残存部は炉床とみられ、南

北約三m、東西約七〇cmを測り、平面形は隅円方形もしくは楕円形と推定されている。炉床の下部には、炭・焼土の堆積が認められている。

No.6地点はさらに上流に位置し、北向きの緩斜面を削り出して三か所の平坦面を形成している。炉1は下段の幅七〇九m、奥行き四〇七mの半月状の平坦面上で検出され、平坦面には、下端の規模三・六×三・三mの焼土・炉壁片を含む円形の盛土と東半部に周溝を設け中央にはカーボンベツド、長側辺に炉壁片からなる「堤防状高まり」が配置される。

No.6地点炉2は上段の平坦面に位置し、盛土、焼土を用いた貼り土、東西両側の溝、カーボンベツト、北側長側辺に「堤防状高まり」が検出されている。

炉1・炉2ともに高位に向かって左側に砂鉄溜、右側に炭溜が確認されている。なお砂鉄については自然科学分析によって花崗岩起源の低チタン砂鉄を原料としたことが推測されている²²⁾。築造の順序は下段の炉1が先行するものと考えられている。

いずれの地点においても土器類の出土はなく、

炉の築造時期については放射性炭素年代測定⁽²³⁾によって、No.5地点炉1が一四世紀前半を中心とする時期、No.6地点炉2が一二〜一三世紀代、炉1が一五世紀代の所産とみられている。

小茅野後山遺跡が所在する岩尾谷川流域の谷筋の両岸には、小支谷の谷川との合流点に接した山麓の緩斜面に少なくとも一〇数か所の鉄滓の集積が認められる。多くは近世のたたら製鉄遺跡と目されるが、あるいは中世から近世にかけての過渡期の遺跡が存在する可能性が留意される。

(6) 古代・中世の製鉄遺跡の特質

以上、宍粟郡内における古代から中世にかけての製鉄遺跡の発掘調査の成果について概観した。事例的には十分な数とはいえないが、ここでは現時点での古代から中世の本地域における製鉄遺跡の特質について整理しておくこととしたい。

遺跡の分布については、安積山遺跡が揖保川と引原川の合流点、小野段林遺跡が引原川、高保木製鉄遺跡が千種川源流、西下野製鉄遺跡が千種川上流にあつて、小茅野後山遺跡以外はいずれも主

要河川に近接した地点に位置している。このことは、古代・中世の製鉄遺跡が原料の砂鉄や燃料の木炭の搬入、さらには生産鉄の搬出に有利な幹道あるいは集落に近い場所に営まれたことを意味している。

次に各遺跡の立地に着目すると、西下野製鉄遺跡・安積山遺跡・高保木製鉄遺跡A地点の尾根の頂部下方の山腹に位置するもの、小野段林遺跡のように山麓の緩斜面に位置し平地と比高差を有するもの、高保木製鉄遺跡B地点・小茅野後山遺跡のように中小河川の河岸に位置するものが認められる。安積山遺跡では木呂穴を有する炉壁片の出土から鞆の使用が想定され、自然風のみによる操業が行われたとは考えられないが、谷からの風の流れと製鉄遺跡の選地については留意が必要であろう。

宍粟郡で確認された製鉄遺跡の炉形態についてはいずれも長方形箱形を呈するものとみられ、中国山地の炉構築の技術的系譜にあることがうかがえる。土佐雅彦⁽²⁴⁾氏は、佐用町滝谷U遺跡⁽²⁵⁾、小野段林遺跡、高保木製鉄遺跡の炉床下の防湿施設に着

目して、粘土帯ブロックを炉の長側辺に沿って堤状に区画し、その内部に木炭を敷いて原初の本床とする製鉄炉を播磨地域で独自に発展したものと捉え、「播磨型」を設定している。

さらに、中国山地の古代末から近世初頭の製鉄炉の地下構造について地域ごとの分類と時期変遷を跡付けた角田徳幸氏は、土佐雅彦氏が「播磨型」とした「粘土ブロック帯による本床状遺構を持つもの」をC型とし、内部に木炭を充填して防湿施設とするものをC1型、炉下部の掘り込みに木炭を二重に詰め、四周に溝状の掘り込みを巡らすものをC2型に分類している、

宍粟郡内では、現在のところ中世末から近世初頭の製鉄遺跡の存在が確認されており、播磨地域で独自の展開を遂げたとされる炉形態の消長と、近世たたら製鉄との関連については不明とせざるを得ない。

四 近世たたら製鉄遺跡の分布

宍粟郡では北部の山間部を中心に多くの製鉄関

係遺跡の分布が知られるが、近世たたら製鉄遺跡が大半を占めている。近世たたら製鉄の成立については、さまざまな構成要素が含まれるが、主要なものとして、炉を覆う高殿の建造、床釣りと呼ばれる大規模かつ緻密な防湿地下構造の構築、天稱輔の導入、砂鉄の安定的供給をもたらす鉄穴流し技術の確立、燃料の木炭の供給の確保、これらを総合した職制の整備などを指標としてあげることが²⁷⁾できる。

宍粟郡における近世の鉄生産については、寛永二年（一六二五）に遡るとい²⁸⁾う史料があるが、本格的な稼業は慶安二年（一六四九）の千草屋源右衛門による経営からであるとされる。²⁹⁾ いずれにしても、宍粟郡では遅くとも一七世紀半ばには、地元商人の請負によって、たたら製鉄が行われていたものとみられる。ここでは、『山崎町史』などに掲げられた文献史料に現われる鉄山名と製鉄遺跡の現地比定にも留意しながら、宍粟郡の近世たたら製鉄を中心とする製鉄関係遺跡の分布状況について概観することとしたい。

なお、宍粟郡内の製鉄遺跡の分布状況を俯瞰す

るうえで看過できない資料が、第二次世界大戦末期の昭和一九年（一九四四）、鉄鉱原料の不足に伴い、宍粟郡内に残された鉄滓の採掘を企図して行われた調査の報告である。³⁰これによれば、宍粟郡内で総計二七三か所の鉄滓の堆積地が確認されている。鉄滓には製錬滓と大鍛冶滓が含まれることや、「タタラ」場の立地条件として木炭の入手が容易で永続性を有する位置、水利の便があり多くは小沢の合流点に位置することなど、多くの示唆に富む内容を備えている。

（1）山崎町域の製鉄遺跡

山崎町域では主として千種町、波賀町の境に近い北部の山間で製鉄遺跡の分布が知られている。³¹一つは先にみた小茅野後山遺跡が所在する谷筋であり、河岸に沿った山麓に一〇か所を超える平坦地や鉄滓の集積が認められ、断続的に製鉄が行われたものと考えられる。北へ鞍部を越すと千種町岩野辺、鷹巣地区に通じる地区であり、原料の砂鉄の調達と合わせて千種町域の製鉄遺跡との関連が留意される。また、一宮町との境に聳える黒尾

山（標高一〇二四・七m）の北西麓の野々隅原、南東麓の与位の高尾川上流でも鉄滓の分布が知られている。

（2）一宮町域の製鉄遺跡

宍粟市の北東部を占める一宮町域では北部の三方地区を中心にくつかの製鉄遺跡の分布が知られている。³²公文川流域では、樅ノ木遺跡、溝谷遺跡、手洗淵遺跡がある。樅ノ木遺跡は、主流と小支流の合流点に小規模な平坦地と下方に鉄滓の集積地があり、近くには鉄山墓が残されている。樅ノ木遺跡については、かつて炉の地下構造の一部が調査されたようであるが、詳細については明らかでない。³³溝谷遺跡では、川岸の斜面に平坦地、鉄滓集積、石垣、水路跡などが認められる。

河原田の阿舎利川最上流の阿舎利遺跡では、小支流の合流点、現集落の東端などで鉄滓の分布があり、相当規模の操業が行われたものと考えられる。その他、波賀町へ越す高野峠周辺には梨ノ木遺跡があり、史料に現われる「カナリ」、「大段」も周辺に存するものとみられる。この地域は、

『播磨国風土記』に記される御方里「金内川」に比定される場所であり、古代中世に遡る製鉄遺跡の存在も含めて詳細な分布調査が必要な地域である。

また、町域南部の下三方・染河内・神戸地区でも製鉄遺跡の分布が認められるが、小規模かつ散在的である。ただし、ここには安積山遺跡が位置しており、他にも前近世に遡る遺跡が存在する可能性も視野に入れる必要がある。

(3) 波賀町域の製鉄遺跡

波賀町域の製鉄関係遺跡については、平成三年（一九九一）度から平成五年（一九九三）度に兵庫県教育委員会によって分布調査³⁴が行われている。調査成果の報告によれば、製鉄関係遺跡が七九か所、鉄穴流し関係遺跡が五一か所の合計一三〇か所が確認されている。製鉄関係遺跡の多くは、立地や遺跡の規模、構造から近世たたら製鉄遺跡と判断されるものである。一方、小規模な平坦面を造成して立地するもの一七か所については、前近世製鉄遺跡に分類されている。分布調査について

は町域のほぼ全体が網羅されているが、相当数の未確認の遺跡の存在が予想される。

近世たたら製鉄遺跡のうち、広路山、万ヶ谷、鍵掛山、赤西山、音水、三久安などはいずれも遺跡群として一括される。一七世紀初頭から前半には史料に現われ、いずれも砂鉄洗い場、高殿、鉄池などの施設を備え広大な山内集落を形成する拠点な鉄山であり、今後のより詳細な個別調査が必要である。

(4) 千種町域の製鉄遺跡

千種町は「千草鉄」・「千草鋼」の名に象徴されるように、宍粟の鉄生産の本拠ともいえる地域であり、ほぼ全域にわたって製鉄遺跡の分布が認められるが、必ずしも全容が明らかにされているわけではない。製鉄遺跡がとくに濃密に分布するのは、主として北部の千種川上流域である。三室山南西麓の三室山、天児屋からさらに上流の奥天児屋、西方の岡山県境に近い鍋ヶ谷、河内の高羅などの諸遺跡が認められる。中部から南部にかけては、荒尾鉄山をはじめとする岩野辺川流域、志引

峠東麓の岩吹たたら跡、東部鷹巣地区一帯にも製鉄遺跡が分布している。

千種町域ではたたら製鉄遺跡のほかにも、西河内の森ノ上、奥天兒屋、笹ヶ谷、鍋ヶ谷などで石組の水路や仕上げの池を持つ鉄穴流し場が分布しており、その規模や構造、周辺のたたら製鉄遺跡への供給関係の検討が必要である。

(5) 天兒屋鉄山跡（兵庫県指定史跡）

天兒屋鉄山跡³⁵は、千種町西河内に所在し、千種川源流域の支流である天兒屋川左岸の南西向きの標高六四〇m前後の山麓斜面に立地する。ここに東西約三〇〇m、南北約四〇〇mの広大な範囲に石垣を備えた棚田状の区画が展開している。

北端の高位部に高殿跡、その下段に鉄池と大銅場、東西方向の通路を挟んだ南に元小屋（勘定場）・馬小屋・倉庫などが配置されている。北東の尾根の先端には稻荷神社、大銅場の東に鉄砂小屋と木炭小屋、さらに東から南の山麓には村下屋敷と山内小屋が整然と連なっている。

昭和五五年（一九八〇）度に行われた確認調査³⁶

では、高殿（鑪）跡、鉄池跡、大銅場跡、馬小屋跡、勘定小屋跡、倉庫群、鍛冶場などの位置がほぼ伝承どおりであることが確認されたほか、用水路・暗渠排水路・石敷通路などが検出されている。なお、「製鉄操業場の「大石垣の基底部」のトレンチ下層部から出土した、多量の鉄滓・木炭・陶質土器・磁器類」の出土から、本遺跡の初現を鎌倉時代に求めている。

昭和五八年（一九八三）度には、北東部の壇状平坦地と南東山麓の山内小屋跡とみられる部分の確認調査³⁷が行われ、北東の平坦地は村下屋敷跡と推定されている。昭和五九年（一九八四）度には、高殿跡の確認調査³⁸が行われ、製鉄炉の基底部と、地下構造の大舟・小舟が良好に遺存したことから、構築状況の詳細が観察されている。また南側では、長さ約四・七二m、幅一・六八m、深さ一・〇五mの石組を施した「旧鉄池」とみられる遺構が検出されている。平成一三年（二〇〇一）には、高殿跡の製鉄炉の保存状況の確認調査が実施され、平成一四年（二〇〇二）四月九日に兵庫県指定史跡となり、天兒屋たたら公園として整備

されている。

(6) 荒尾鉄山跡(宍粟市指定史跡)

荒尾鉄山跡は、千種町岩野辺に所在し、千種川上流域の支流である岩野辺川のさらに支流である荒尾川の左岸の西向きの標高五六〇m前後の緩斜面に立地する。南北約三〇〇m、東西約一〇〇mの範囲にわたり、中央通路の両脇に棚田状の石垣を伴う区画が展開している。川側の高位から金屋子神祠・高殿・鉄池・大鋸場・大鍛冶場、山麓側に勘定場・倉庫群・山内小屋などの配置が想定されている。明治一〇年代まで操業が続けられていたといわれ、天児屋鉄山跡と並ぶ大規模かつ拠点的なたたら製鉄遺跡である。

五 まとめ

宍粟郡における鉄生産については、『播磨国風土記』の産鉄記事や西下野製鉄遺跡の調査成果に見られるように少なくとも奈良時代初頭には開始されていたものとみられる。その背景には原料と

なる良質な砂鉄の分布と燃料となる木炭を供給する豊富な山林資源の存在がある。古代・中世の製鉄炉は中国山地の技術的系譜のもとに長方形箱形を呈する形態を一貫して採用し、中世には播磨地域独自の構造を発展させるに至る。このころには、「宍粟鉄」・「千草鉄」・「千草鋼」の名のもとに、とりわけ刀剣の原料として重用されるようになる。中世播磨に覇を唱えた赤松氏や、宇野氏、安積氏、中村氏といった在地領主と鉄生産の関係も注目されるところである。近世への過渡期の製鉄遺跡については明らかでないが、宍粟郡での鉄生産が継続して行われていたであろうことは疑う余地がない。

江戸時代になると、一七世紀前半から中頃以降、宍粟郡北部の幕府直轄領の各所において、近世たたら製鉄の諸要素を備えた鉄山経営が山崎城下の地元商人の請負によって盛んに経営されるようになったことが多くの文献史料⁴⁰⁾で明らかにされている。幕末には一部大坂資本の参入も認められるが、西洋式の近代的製鉄技術が導入されたことにより、宍粟郡のたたら製鉄は明治十年代には終焉を迎え

ることとなった。

今後は、古代から近世に至る製鉄遺跡のさらなる調査研究はもとより、文献史料、社寺への奉納品、石造物、古道、信仰、民俗資料などの歴史文化資料を総合的に把握し、宍粟郡のみならず播磨地域の歴史を特色付ける「たたら文化遺産」として、保全と活用を図っていく必要がある⁽⁴⁾。その他、残された多くの課題については、後日を期すこととしたい。

(1) 以下、歴史的事象として記述する場合は宍粟郡、現行地名の場合は宍粟市と表記することとする。

(2) 宇野正磯編『近世千草鉄山史料』上・中・下(一九六六・六八・七〇年)、井口二四雄『ちぐさ鋼に就て』(一九七五年)、井口二四雄・鳥羽弘毅編『たたらと村と百姓たち―千草鉄関係史料集』(一九八三年)、上山勝編『奥播磨の製鉄史―たたらへの解明』(一九九五年)、鳥羽弘毅『たたらと村―千草鉄とその周辺』(千種町教育委員会、一九九七年)、宇野正磯『宍粟鉄の軌跡を逐う―千草鉄山史話』(『地域史栄光と影随想』第二編、二〇〇六年)など。

(3) 錦耕三・平山敏治郎編『奥播磨民俗採訪録』(近畿民俗学会、一九五三年)、兵庫県教育委員会編『千種―

西播奥地民俗資料緊急調査報告』(『兵庫県民俗調査報告』四、一九七二年)、石塚尊俊「鑪採訪記 播州千種の奥」(『鑪と刳舟』慶友社、一九九六年)など。
(4) 『山崎町史』(一九七七年)、『千種町史』(一九八三年)、『一宮町史』(一九八五年)、『波賀町誌』(一九八六年)。

(5) 兵庫県教育委員会編『製鉄遺跡Ⅱ(波賀町)』(『兵庫県生産遺跡調査報告』第五冊、一九九四年)。

(6)・(7) 『播磨国風土記』の引用にあたっては、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著『播磨国風土記』(山川出版社、二〇〇五年)を用いた。

(8) 播磨地名研究会編『古代播磨の地名は語る―播磨国風土記めぐり』(神戸新聞総合出版センター、一九九八年)。

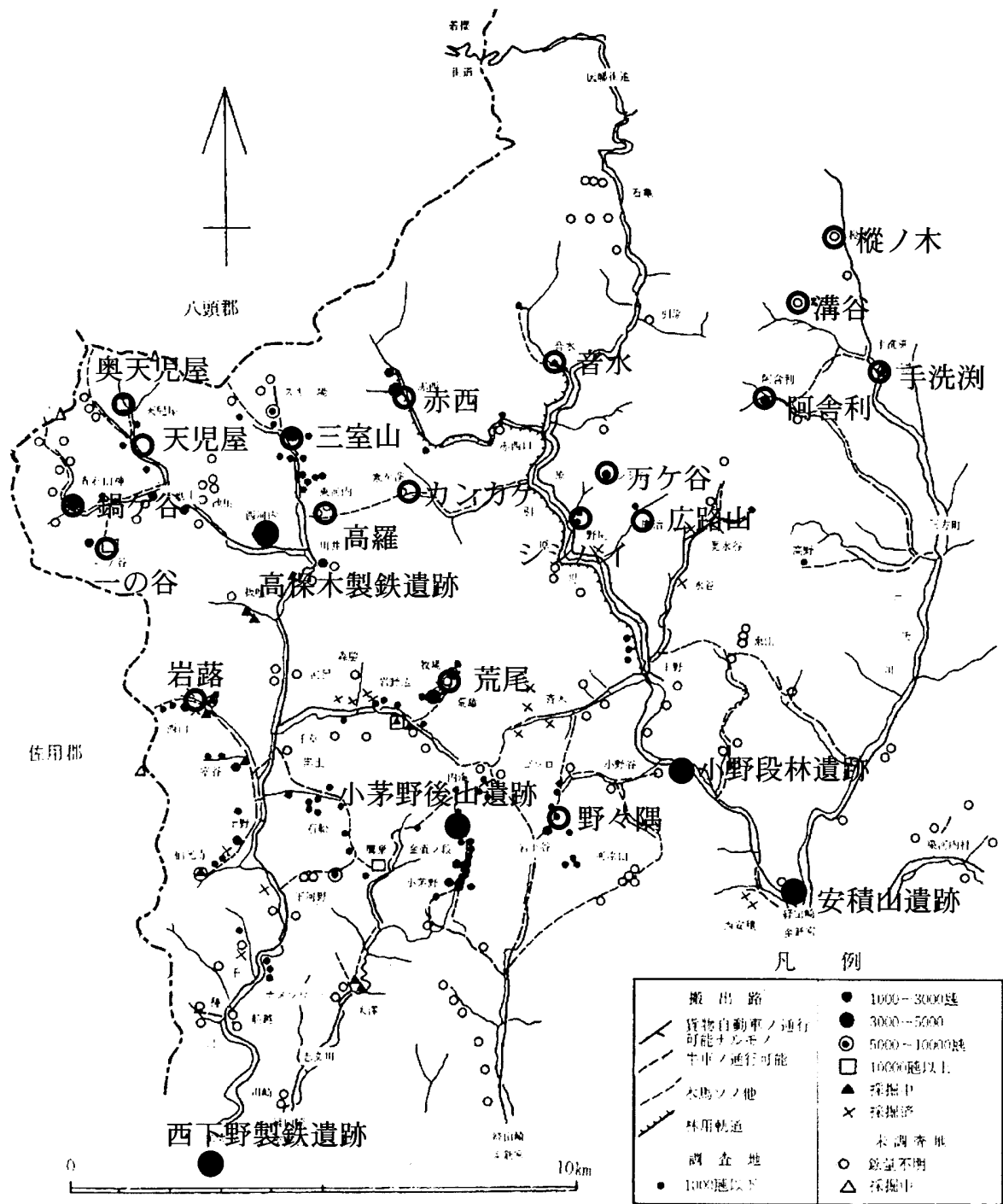
(9) 奈良文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』二〇(二〇〇六年)、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査出土木簡概報』二・一〇・一(一九六四・七五・七七年)。

(10) 岡本明郎「山部と製鉄―その系譜と文化をめぐって」(『古代の日本』四(中国・四国)角川書店、一九七〇年)、福島好和「古代播磨国における山部氏について」(『関西学院史学』三一、二〇〇四年)、福島好和「『播磨国風土記』にみえる鉄について」(『関西学院史学』三三、二〇〇六年)。

(11) 村上紘揚ほか「西下野製鉄遺跡」(『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―佐用郡編』

- (7) 『兵庫県文化財調査報告』第十一冊(二分冊)、一九七六年)。
- (12) 今井林太郎監修『兵庫県の地名Ⅱ』(『日本歴史地名大系』二九Ⅱ、平凡社、一九九九年)。
- (13) 一宮町教育委員会編『安積山遺跡―第2次発掘調査の記録』(『一宮町文化財調査報告』九、一九九六年)。
- (14) 前田徹編『播磨北部の生業と武士』(『企画展資料集』No.二三、兵庫県立歴史博物館、二〇〇四年)。
- (15) 千種町たたら発掘調査団編『千種のたたら』(千種町教育委員会、一九六八年)、和島誠一「兵庫県宍粟郡千種町西河内のタタラ遺跡発掘」(『日本考古学の発達と科学的精神―和島誠一主要著作集』同著作集刊行会、一九七三年)、上山勝・丸山竜平編『高保木製鉄遺跡』(千種町教育委員会、一九八九年)。
- (16) 上山勝・丸山竜平編『高保木製鉄遺跡』(千種町教育委員会、一九八九年)。
- (17) 渡辺昇「小野段林遺跡」(『製鉄遺跡』Ⅱ兵庫県生産遺跡調査報告第五冊、兵庫県教育委員会、一九九四年)。
- (18) 岩井忠彦「三方と三方西」(『播磨の光芒―古代中世史論集Ⅰ』中央出版エージェント、二〇〇四年)。
- (19) 宇野正碓「千草鉄と備前長船鍛冶―中世千草鉄研究試論」(たたら研究会編『日本製鉄史論』一九七〇年)。
- (20) 海津一朗「東国における郡鎮守と郡内地領主群―鎌倉末期秩父地方の郷々地頭『一揆状況』」(『季刊中世の東国・春』六、一九八三年)など。
- (21)・(22)・(23) 村上泰樹編『小茅野後山遺跡―中世製鉄遺構の調査』(『兵庫県文化財調査報告』第三四三冊、兵庫県教育委員会、二〇〇七年)。
- (24) 土佐雅彦「播磨の鉄」(櫃本誠一編『風土記の考古学②「播磨風土記」の巻』同成社、一九九四年)、土佐雅彦「播磨を支えた古代の鉄―一宮町三方、千種町高保木、佐用町大撫山などの調査から」(播磨学研究所編『地中に眠る古代の播磨』神戸新聞総合出版センター、一九九九年)。
- (25) 土佐雅彦「滝谷U遺跡」(『製鉄遺跡Ⅰ(佐用郡)』兵庫県生産遺跡調査報告第一冊、一九九二年)。
- (26) 角田徳幸「中国山地における中世鉄生産と近世たたら吹製鉄」(『日本考古学』二九、二〇一〇年)、角田徳幸「たたら吹製鉄の成立と展開」(清文堂、二〇一四年)。
- (27) 光永真一「たたら製鉄」(『吉備考古ライブラリー』一〇、吉備人出版、二〇〇三年)。
- (28) 「播州宍粟郡須賀村山方御役所附前々より勤方覚書」(宇野正碓編『近世 千草鉄山史料』下、一九七〇年)。
- (29) 『山崎町史』、鳥羽弘毅「たたらと村」など。
- (30) 田辺健一「兵庫県宍粟郡下の「タタラ」鉄滓調査報告」(『東北地理』八一、一九五五年)。
- (31) 兵庫県教育委員会編『兵庫県遺跡地図』(二〇一一

- 年)。
- (32) 一宮町教育委員会編『一宮町埋蔵文化財分布調査報告書』(一宮町文化財調査報告一〇、一九九九年)。
 - (33) 『一宮町史』(一九八五年)、鳥羽弘毅『たたらと村』。
 - (34) 兵庫県教育委員会編『製鉄遺跡Ⅱ(波賀町)』(兵庫県生産遺跡調査報告第五冊、一九九四年)。
 - (35) 注(2)の文献、『千種町史』(一九八三年)など。
 - (36) 村上紘揚「播磨における製鉄遺跡の調査―中世から近世の千種町製鉄遺跡」(『歴史手帖』九―八号、一九八一年)。
 - (37) 千種町教育委員会編『昭和五八年度千種町天児屋タタラ遺跡発掘調査実施報告書』(一九八四年)。
 - (38) 千種町教育委員会編『昭和五九年度千種町天児屋タタラ遺跡発掘調査実施報告書』(一九八五年)。
 - (39) 『千種町史』、鳥羽弘毅『たたらと村』など。
 - (40) 宇野正碓編『近世 千草鉄山史料』上・中・下など。
 - (41) 千種中学校二年生がたたら製鉄学習として砂鉄の採集から製鉄実験までを行っている。また、宍粟鉄を保存する会では、たたら製鉄の調査研究、啓発、史跡のガイドなどの活動を行っている。



宍粟市内の鉄滓散布地と主な製鉄遺跡

- 古代・中世の製鉄遺跡
- 近世たたら製鉄遺跡

上山勝・丸山竜平編『高保木製鉄遺跡』（千種町教育委員会、1989年）挿図29に加筆。原図は、田辺健一「兵庫県宍粟郡下の「タタラ」鉄滓調査報告」（『東北地理』第8巻第1号、1955年）。